

【レバノン】 幻影としての 外からの脅威

佐野光子

レバノンと言えば、一五年間にわたって続いた内戦、相次ぐ政治家の暗殺や爆弾テロ、イスラエルによる爆撃といたった臭いイメージを真っ先に思い浮かべる向きも多いことだろう。確かにレバノンの人々が数十年間にわたって戦火とその後の混乱、政治的・社会的緊張の中で苦しんできたことは疑いようもなく、メディアを通して海外に伝えられたニュースや映像のほとんどが「物騒な」事象にかかわるものであったことは否定できない。

一方、真夏の夜にベイルートの繁華街をそぞろ歩く観光

客たちは、この国に対して「享乐的」「華やか」「軽い」といったイメージを持つかもしれない。街中にとりこまれ、ひしめくレストランやカフェのテーブルに陣取る女性たちはスター顔負けの派手なメイクに大胆な露出のドレスを着こなし、男性たちは賑やかに談笑しながらアルマツザビールの小瓶や白濁したアラクのグラスを片手にアルギーレ（水タバコ）を煙らす。このようなレバノン人の紋切型とも言える光景もまた、ときに誇張されすぎることがあるとはいえ、確かにレバノンのある一面を象徴している。

しかし、この二つの両極的なイメージが声高に伝えられる一方で、レバノンやレバノン人を構成する肝のような部分がレバノンをめぐる表象の中ですっぽりと抜け落ちていくように思われてならない。それらが何か、明晰な言葉で捉えることは残念ながら筆者の力量では適わないが、その中の一つを取って言葉で表現しようとするならば、山の生活のリァリティや小規模な山岳村独特の感覚とでも言うべきものがあるのではないかと感じている。

歴史的見地に鑑みても、そしてしばしばモザイク社会と表現されるレバノンの宗派別人口分布図から見ても、山々に点在するそれぞれに宗派の異なる小規模コミュニティ群には、例えばカイロやダマスカスといった大都市に根を張って生きてきた人々とは違った感覚があっても何ら不思議はないだろう。そして、このような山の民独特の感覚

は、いくつかのレバノン映画の中に、とりわけ一九六〇年代までの初期作品群の中に見出すことができる。

移民ブーム——不在という存在

ジョージ・ナスル監督の『何処へ』はレバノン映画を初めて国際的に知らしめた作品としてレバノン映画史上極めて重要な作品であるが、これは徹頭徹尾、山の映画である。舞台は一九三〇年代のレバノン、山間の小さな農村。

二人の幼子を抱えた農民の夫婦は貧しいながらも幸せに暮らしていた。しかし当時の村の人々の間では、豊かな暮らしを求めたブラジルへの移民が密かなブームとなっていた。先の見えない暮らしに不安を抱いていた父親も徐々に夢の国ブラジルへの移住に心を動かされるようになる。そしてとうとう、妻の反対をよそに、妻子を残しブラジルへと向かう船上の人となった。

それから約二〇年。二人の息子は成長し、兄は父が残した農地を引き継ぎ、弟は大学卒業を目前に控えていた。兄は精力的に働き農業を軌道に乗せ、幼馴染の女性と結婚もし、地に足をつけた幸せな家庭を築く一方で、弟は就職がなかなか決まらず苛立ちが隠せない。やがて彼の父が辿った道をなぞるかのように移民の道を考え始める。そんな折、村のはずれの気に入りの場所で弟は初老の見知らぬ男と出会う。その男はブラジル移民に失敗したなれの果てで

あった。移民への夢と希望を熱く語る弟に、男は移民生活の厳しい現実と挫折、幻滅の日々を語り、この地に留まるよう助言を与える。しかし若い弟の移民に賭ける情熱は極めて熱く、ひとり着々と準備を進めていく。そして出発を目前に控えたある日、弟は車に轢かれ重傷を負う。偶然、事故現場に居合わせた移民帰りの男は、弟を兄たちのいる自宅へ運び医師を呼ぶ。そして流血の止まらない弟のために自ら献血を申し出る。

実はこの男は二〇年前に家族を捨てた実の父親であった。しかし長い年月を経て、息子たちは父親の顔を忘れ、父親もまた異郷の地での挫折と貧困の中ですっかり風貌が変わってしまった。弟は無事一命を取り留めるが、男は息子たちに自らの正体を明かすことなく、また病床に伏せる妻に顔を合わすこともなく、ひっそりと彼らの前から姿を消す。

このように、『何処へ』は二〇世紀初頭の移民ブームを背景に夢破れ故郷にすら居場所を失った男の姿を切々と描き上げた作品である。そこでは、この男の挫折と悲哀を反面教師として、レバノンの地の豊かさ、脈々とこの地で受け継がれてきた血の濃さが、美しい自然や家畜、日々の労働、文化風習を記録映画のごとく写し取ったショットの数々と「献血」という象徴的な行為によって力強く確認されている。

ここで筆者が注目するのが、風来坊のように現れ瞬く間に去って行った父親の描かれ方である。不在、あるいはそこに存在しないもののことをアラビア語でガイーブ (ghaib) と言うが、まさに彼は本来そこに存在しないはずの人物である。肉体としては確かに存在し、息子に血まで分け与えながら、ガイーブのままどこからともなく村に現れどこへともなく去って行く。つまりこの小さな山のコミュニティにおいて彼はソトの人間であり、子供たちの父親としてのアイデンティティはガイーブとしてしか存在しないのである。

外からの脅威——不存在の実体化

この奇妙な存在のあり方は、レバノンの歌姫フェイルーズ主演のミュージカル映画『指輪売り』の中で、変奏された形ではあるが、よりはっきりとした形で現れる。

レバノン杉の森からほど近い山間の村のムフタール(村長)は、退屈なほどに平和な村にちよつとした刺激を与えて村内を引き締めようと、ある策略を試みる。強盗にして殺人鬼の悪漢ラージハという架空の男をでっち上げ、その男が現在この村へ向かっているという噂を村内に流したのだ。真に受けた村人たちは恐れおののき警戒し始めるが、ムフタールの策略に感づいた二人組の男がその架空の男の名を借りて悪事をはたらき始め、村は恐怖と混乱に陥る。

慌てたムフタールは犯人捜しを始める一方、村では結婚・婚約式を兼ねる一大イベント「独身祭」に向けて着々と準備が進んでいる。そして独身祭の最中、なんと会場にラージハと名乗る老人が現れる。村人たちの間に緊張が走るが、実は彼はアクセサリーの行商人であり、その日結婚式を挙げたカップルたちに指輪を提供し、その見返りにフェイルーズ演ずるムフタールの姪リマを息子の嫁にと求め、彼女を連れて村を去って行く。

『指輪売り』では、このように本来存在しないものを捏造した結果、それが実体化してしまうのだ。つまりガイーブであるはずのものが存在してしまったということになる。まさに「嘘から出た真」であるが、映画はめでたいハッピーエンドとして幕を閉じるとは言え、ムフタールは自ら作り出した「恐ろしい」ガイーブに愛する姪を連れて行かれるという形になる。このように、外から「何か恐ろしいもの」がやってくるというイメージあるいは感覚は、レバノン山岳地域に小規模なコミュニティを形成して住まってきた部族が根源的な次元で抱える恐怖なのではないだろうかと思像できる。

この『指輪売り』はレバノン映画史の中でも燦然と輝く金字塔的存在であり、続く『エグザイル』、『警備人の娘』と合わせてフェイルーズ三部作と呼ばれている。そして興味深いことに、この国民的三部作のプロットすべてが山間



写真『警備人の娘』より

のコミュニティを取り巻く「外からの脅威」に基づいて成立しているのである。例えば二作目『エグザイル』は、オスマントルコ軍に包囲され兵糧攻めに苦しむ村の人々が自らの生活と尊厳のためにレジスタンスとして抵抗する物語であるし、三作目の『警備人の娘』は、平和になったことを理由に村から解雇された警備人の父親の雇用を守るために、フェイルーズ演じる娘が夜な夜な強盗の身なりをして猟銃を撃ち放ち村の人々を怯えさせ、外敵の存在を演出するという話である（写真）。いずれも風光明媚で牧歌的な自然に恵まれた山間の小さな村を舞台に、レバノンの伝統音楽を取り入れたラフバーニー兄弟作詞作曲による楽曲をフェイルーズが高らかに歌い上げるミュージカル映画であるが、その根底には絶えず「外からの脅威」を警戒する山の小規模コミュニティ独特の心性が潜んでいる。

幻影としての外からの脅威

こういった「山の映画」は内戦勃発以降すっかり影をひそめ、代わりに首都ベイルートを描き出す作品が圧倒的に多くなった。しかし近年、いわゆる「杉の革命」があった二〇〇五年頃から再びレバノン映画に山の物語が姿を現しつつある。レバノンを代表する女性監督ナディーン・ラバキーの新作『私たちはどこへ行くの？』もまた、匿名的な山間部の村を舞台にした作品だ。村ではこれまでイスラム

教徒もキリスト教徒も互いを尊重し合いうまく共存してきたが、周辺の村々で繰り広げられる宗派間抗争に人々の心は次第に惑わされていく。徐々に好戦的になる男性たちに不安を抱いた女性たちは、戦争を回避するため宗派の違いを超えて結託し、ある大胆な計画に着手するという内容だ。

本作は宗派抗争を扱ってはいるが、ユーモアあふれるショットや言葉遊びがふんだんに散りばめられており、映画館では随所で笑いが沸き起こるほどであった。ただ、映画では最後のほうで一人だけ死者が出てしまう。しかしこの犠牲者は村内の争いによるものではなく、周辺の村での銃撃戦に巻き込まれて命を落としたという設定になっている。ここでもやはり、脅威は内側からではなく外からやってくるのだ。そして死者の棺を担いだ長い葬列が向かうべき方向も定まらずに漂流するところで映画はエンディングを迎える。

内戦終結以降、レバノンとはときに一線を越えながらもギリギリのところで矛先を収め、危うい綱渡りを続けながら宗派・派閥間のバランスを一応は保ってきた。しかし人々は今、隣国シリアから国境を越えて忍び寄る不吉な足音に注意深く耳をそばだて、内戦の再来に怯えている。もちろん、現実には迫り来る「外からの脅威」との対峙は、映画の中ほど容易でもユーモアに満ちたものでもないだろう。そ

れでもなお、外敵に見えるものが実は内部の人間が創り出した幻影にすぎなかった、というレバノン映画の寓話になぜか含蓄を感じてしまうのである。

映画リスト

- 『何処へ』……① *Lebanon*、② ジョージ・ナスル、③ 一九五七年、④ レバノン、⑤ アラビア語、⑥ 未公開。
- 『エグザイル』……① *Exile*、② ヘンリー・バラカート、③ 一九六六年、④ レバノン、⑤ アラビア語、⑥ 未公開。
- 『警備人の娘』……① *The Girl on the Train*、② ヘンリー・バラカート、③ 一九六七年、④ レバノン、⑤ アラビア語、⑥ 未公開。
- 『指輪売り』……① *The Ring Seller*、② ユセフ・シャヒーン、③ 一九六五年、④ レバノン、⑤ アラビア語、⑥ 未公開。
- 『私たちはどこへ行くの?』……① *Where Are We Going?*、② ナディーン・ラバキ、③ 二〇一一年、④ レバノン、フランス、イタリア、エジプト、⑤ アラビア語、⑥ カタール・ウィーク (二〇一一)。

著者紹介

- ① 氏名……佐野光子 (さの・みつこ)。
- ② 所属・職名……慶應義塾大学 SFC 研究所・上席所員 (訪問)。
- ③ 生年・出身地……一九七〇年、群馬県生まれ。
- ④ 専門分野・地域……アラブ映画史。レバノン、シリア、エジプトをはじめとする全アラブ地域の映画作品を対象としている。
- ⑤ 学歴……慶應義塾大学総合政策学部卒業、同大学政策・メディア研究科修士課程修了。

⑥ 職歴……二〇〇六年から六年間、バイルット・セントジョセフ大学に勤務。二〇〇八年から一年まで同大学学術交流日本センター副所長。

⑦ 現地滞在経験……二〇〇二年九月から〇三年三月までシリアのアレッポを拠点にフィールドワーク（アレッポ大学学術交流日本センター訪問研究員）。二〇〇五年九月から一二月まで、レバノン、エジプト、モロッコ、アラブ首長国連邦にてフィールドワーク（平成一七年度中東次世代フェローシップ、国際交流基金）。

⑧ 研究手法……アラブの映画作品の多くは映像ソフト化されないため、アラブ映画が上映されると聞けば駆けつけて直接スクリーンで観る。一期一会となる作品も多く、この機会を逃したらもう二度と観られないと思ったら航空券を買ってでも行く。とりわけ映画祭は作品と人と情報が一堂に会するので重要。

⑩ 研究上の画期……二〇〇六年七月にイスラエル軍によるバイルット国際空港爆撃から勃発したレバノン戦争に巻き込まれたこと。以来、研究対象地域に対して肝が据わったように思う。

⑪ 推薦図書……Garcia Canclini, Néstor (1995), *Hybrid Cultures. Strategies for Entering and Leaving Modernity*, Christopher L. Chiappari, University of Minnesota Press.

⑫ 推薦する映画作品……『パラダイス・ナウ』（ハニ・アブ・アサド監督、二〇〇五年、フランス、ドイツ、オランダ、パレスチナ）。

【シリア】 革命と表現の自由・ 不自由

佐野光子

二〇一一年初頭にいわゆる「アラブの春」の流れに乗って始まったシリア反政府運動はやがて政権側との軍事衝突に発展し、今や内戦状態とまで呼ばれる事態となった。騒乱は一向に収まる気配を見せず、外国人戦闘員の流入などもあり戦禍は日々深刻化している。穏やかで平和な日常が悠然と続くシリアでの日々を短い間とはいえ経験した者として、さらには長期居住していたレバノンが政情不安に陥るたびに隣国シリアの泰然とした様を羨望の眼差しで眺めていた者として、かつてのレバノンとシリアとが入れ替